Topics

FUKUSHIMA × NAGASAKI University

福島が経験した複合災害を伝承

～一人一人の歴史・証言を保存～

長崎大学 原爆後障害医療研究所 教授／長崎大学 福島未来創造支援研究センター センター長
東日本大震災・原子力災害伝承館 館長

高村 昇 教授

巨大地震・津波・原子力災害という複合災害を教訓として伝える「東日本大震災・原子力災害伝承館」が、福島県双葉町に開館しました。館長を務める高村昇教授は、「災害に立ち向かい、今もなお復興に取り組む人々の思いを知ってほしい」と話します。

災害にどう立ち向かったかを展示

二〇二〇年九月二十日、福島県双葉町に「東日本大震災・原子力災害伝承館」が開館しました。この伝承館は、福島が経験した地震・津波・原子力災害という前例のない複合災害の記録と記憶を、今後の防災や減災の教訓として伝えることを目的としています。地上三階建て、延床面積五千二百五十六平方メートルで、全面ガラス張りのカーブを描いた外観が特徴です。

伝承館は、「未来への継承・世界との共有」、「防災・減災」、「復興の加速化への寄与」の三つの基本理念を掲げ、館内を「プロローグ」、「災害の始まり」、「原子力発電所事故直後の対応」、「県民の想い」、「長期化する原子力災害の影響」、「復興への挑戦」の六つのエリアに分けています。プロローグでは、地震・津波・原子力災害発生当時の映像をアニメーションと組み合わせて、複合災害の実態と未来について考える導入部としています。

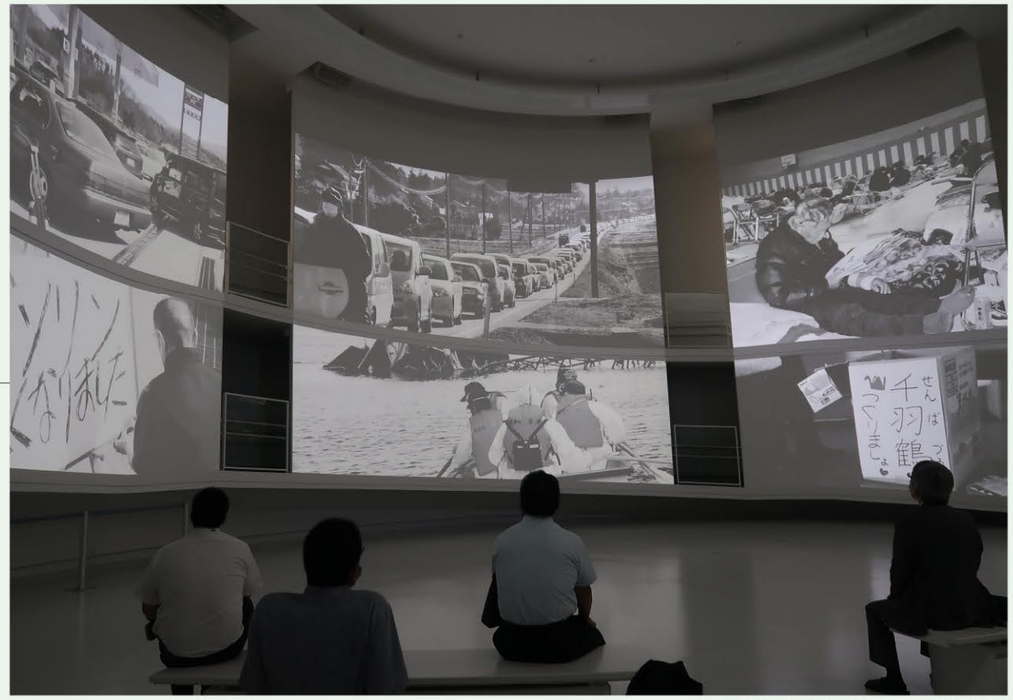
他の五つのエリアには、それぞれのテーマに合わせて、福島県が収集した約二十四万点の資料のうち約二百点を展示しています。資料には、国内外からの応援メッセージ、さまざまなイベントで配布されたプリントなどの紙資料、震災直後の映像やデジタルデータ、フィルムなども含めた写真資料、さらには川内村で避難を促した防災無線などの音声データも含まれています。これらの資料を通して、複合災害がもたらしたもの、そして復興の過程を知ることができます。

東日本大震災・原子力災害伝承館

語り部の講話で災害の風化を防ぐ

被災者の生の声を聞く「語り部講話」も行っています。震災と原発事故の記録は、展示されている資料がすべてではありません。複合災害とその後の混乱を経験した人たちの話を聞くことで、震災や原発事故についてより詳しく知るきっかけにしてほしいと思いますし、話を聞いた人が当時を追体験することで、災害の風化を防ぐことができると考えています。

伝承館では、福島での複合災害への対応や、復旧・復興の経験と記録を教訓として体系化するとともに、さまざまな形で情報発信することで復興や防災を担う人材の育成を図るための調査・研究事業を行う予定です。具体的な研究テーマについてはこれから議論を深めていきますが、複合災害から得られた教訓を世代を超えて継承するために必要不可欠な事業と考えています。


展示の導入として、震災前の地域の生活、地震・津波そして原子力発電所事故の発生から住民避難、復興や廃炉に向けた取り組みについての映像を投影。

館内写真／出典:東日本大震災・原子力災害伝承館

福島が歩んできたこの十年は、震災と原発事故の発生、混乱、避難、収束、除染、帰還、復興と、これまで誰も経験したことのないことばかりでした。伝承館では、今後も一人一人が複合災害にどう立ち向かい、復興にどう取り組んでいるのか、「生の声」のアーカイブ化を続け、来館者が「誰も経験したことのないことが起きたんだ」と思える場になるよう努めていきます。

各町村の状況に沿って支援を継続

自治体の支援も引き続き行っていきます。いち早く全村帰還を宣言した川内村では、帰村前から環境放射線モニタリングを行い、その後は戻ってきた村民が安心して暮らせるようリスクコミュニケーションを積み重ねるなどの支援をしてきました。二〇一三年には川内村と長崎大学が包括連携協定を結び、復興推進拠点を設置しました。二〇一六年には隣接する富岡町と、二〇二〇年には大熊町とそれぞれ包括連携協定を締結し、復興支援を行っています。

ただ、町村によって復興の過程はまったく異なり、それぞれの状況に沿った復興への取り組みと支援が求められます。川内村の居住人口は震災前の約八割まで回復しました。しかし、富岡町は震災前の一割弱の千五百人しか帰還しておらず、大熊町は数百人です。伝承館のある双葉町は、現在も大部分が帰還困難区域で、帰還は始まっていません。長大は、それぞれの町や地区の状況を把握し、役場のマンパワーなども考慮しながら、支援を続けていきます。

福島ではいまだ三万人以上が避難生活を余儀なくされています。震災から十年の節目を迎えましたが、復興に終わりはありません。各自治体の支援を継続する一方で、伝承館の活動を通じて、現在福島で取り組みが進む「福島イノベーション・コースト構想」の一翼を担っていきたいと思います。

原子力災害の経過を時系列でたどる。

困難を乗り越え復興に挑戦する福島県の姿を紹介する展示ブース。

福島大学の福島復興支援の取り組みは、Choho特別号でも紹介しています。